

いつの日か私も

木村幸子・作

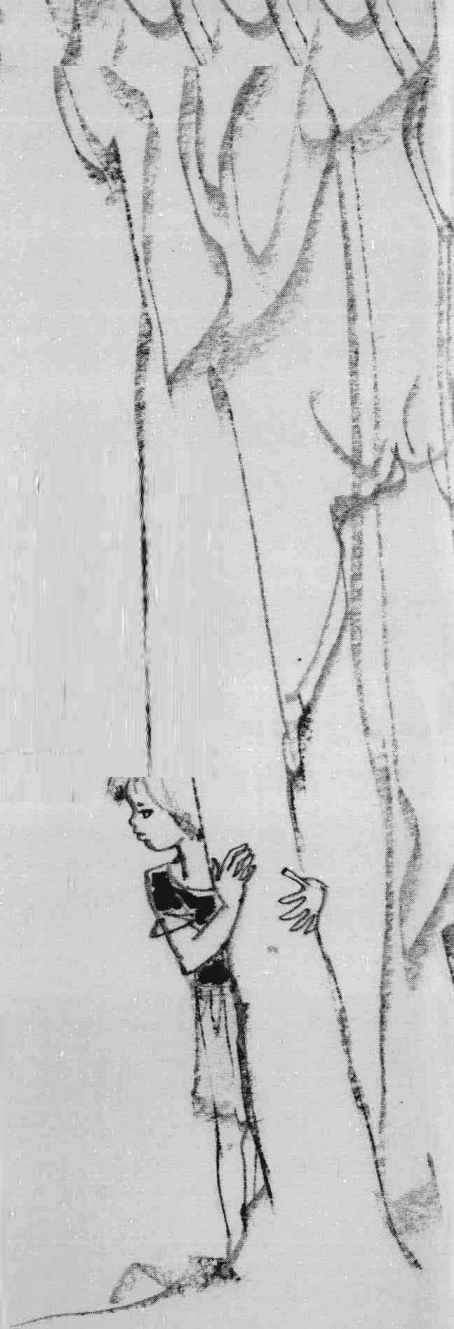
田中禎子・絵



しづかの日は私にも

木村幸子・作

田中槇子・絵



木村 幸子

いつの日か私も

ポプラ社 1983 (文学の館 4)

文学の館 4

いつの日か私も

1979年12月 第1刷 1983年2月 第4刷

著 者 木 村 幸 子

画 家 田 中 槇 子

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町 5

振 替 東京 4-149271

印 刷 新興印刷製本株式会社

製 本 富士製本株式会社

落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。

NDC 913/199p/21cm 8093-105004-7764

いつの日か私も／もくじ

第一章	課外授業	5
第二章	夏休み	47
第三章	とまどい	83
第四章	涙	109
第五章	一高入試	147
第六章	いつの日か……	167
解説	岩崎京子	196





第一章 課外授業



梅雨の晴れ間とはいえ七月に入つての午後の日ざしはきつい。

石城中学校三年一組の教室は、いつのまにか机全体が日かげの廊下側に寄せられている。

五時間目の始まりを知らせるチャイムが鳴りだし、学級委員の佐々木敏子が職員室から持つてきた出席簿を教卓の上において自分の席にもどつた。

それを合図のように受持ちの塚越先生が入つてきて、大またにはずみをつけて教壇にあがつた。その先生のように、へあつ、また、なにかおもしろい話があるんだなと、教室のなかに一瞬、期待に満ちた小さなざわめきが流れた。

「起立！ 礼！」

おなじ期待を胸に号令をかけ終わった敏子は、手を、そつとほおにあてていた。

日に何度となくくり返す号令だが、そのたびに面映ゆく、顔があつくなるような気がするのだった。

国語が担当の塚越先生のあだ名は〈感激屋〉。嬉しいこと、悲しいこと、驚いたこと、おもしろ

かったこと、なにかあるたびに自分の気持ちを生徒に、素直に熱っぽく語りかける。

去年の春、石城中学校に赴任してきて、二年生だったこのクラスの担任になったばかりのころは、四十歳に近い男性が、中学生を相手に真剣にしゃべりかけてくることにとまどい、おかしがつてへ感激屋というあだ名をつけた生徒たちだった。

それが、今では、先生がなにか新しい出来事に感激して話しかけてくれることを待っている。

ことしの五月に、先生の奥さんにはじめての赤ちゃんが生まれた。

そのときの先生の感激ぶりは最高だった。赤ちゃんとの初対面が恥ずかしくて、自分がどんな顔をしていればいいのか迷ってしまったと、本当に恥ずかしそうに顔を赤らめながら黒板にへ麻子と書いた。

「へ麻子」と名づけたんだ。麻のように強くなってほしいとの願いをこめてね。強くというのは、身体はもちろんだが、心もということなんだ。実は、ぼくがみんなと同じ中学三年だったときの担任の先生は、第二次世界大戦で日本が敗けたときに満州から引き揚げてきた方だったんだが、あるとき、その引き揚げ中の苦労話をして、『引き揚げの途中で亡くした娘の遺骨を首にかけて引き揚げ船をおりたとき、夕日に映えた日本の空は、胸が痛くなるほど美しかった』と、いわれた。教室じゅうが静まりかえり、先生の目には涙があふれていた。ぼくも、先生の話に感動して目に涙がにじみかけていた。ほんのちょっとしたきっかけ、だれかに、ぼんと背なかでも

たたかれたら、もう、ワッ！と泣きだしてしまひそうな、そんな状態だった。と、同時に、ぼくの心の片隅には、もし、そうならたいへんだ、恥ずかしいという思いが浮かんた。とっさにぼくは、泣くかわりに笑った。声をあげてね。そのぼくの笑い声につられたように何人かが声をあげて笑った。笑いすぎて涙のでたようなふりをして、こぶしで目をぬぐいながら、ぼくは、自分の思いがだれにもみすかされずにすんだことで安心していた。しかし、時のたつごとに、自分の態度が、どんなに先生を傷つけてしまっていたか、そのときいっしょに笑った連中も、もしかしたら本当は、泣きたかったんではなかったろうか？ それを、ぼくが笑ってしまったためにと気になってね。どうして、ああいうことをしてしまつたのかね？……。きつと、今でいう、つっぱってるってやつなんだろうね。自分の心のなかの優しさとか悲しさ、なにかにたいしての感動を自然のまま素直に表現するのが恥ずかしいような感じでかえって反対の言動をしたりする。そんなつっぱりは、むしろ心の弱さからきてるんだと思うんだが……。子どもには、そんな弱さは持つてほしくない。自分の気持ちを、どんなときにも素直にあらわせる心の強さを持つてほしい。麻のように強く！ そう考えて麻子と名づけたんだ。」

話し終わった先生は、眼鏡をはずし、レンズをハンカチでこすっていた。

きょうの塚越先生も、教室じゅうの期待を裏切らずに、あいさつをかわす間もおしそうにしゃべりだした。

「実は、去年、この石城中学校に赴任してきたときから不思議だと思つていたことがあつたんだ。はじめて、この石城駅におりたときにへこれは、だまされたなという感じだった。石城中学校に転任がきまつて聞かされた話では、石城町というのは、海あり山ありで山海の珍味が豊富、かつては炭坑で栄え、今は、工場誘致で栄えている。東京への便も急行で三時間足らずと、そんなことだったから、ちょっとした東北の小都市を想像してたもんだ。それなのに石城駅の前は閑散としてバス停があるだけで商店街も町並もない、見わたしても松林しか目に入らない。その向こうが太平洋だということは、汽車の窓からながめてわかつていた。駅員に聞いて、石城中学校行きのバスに乗った。バスは、たんぼの中を走りつづけた。奇妙なことにたんぼのど真ん中を立派な舗装道路がえんえんとつづいている。そして、その前方の空には雪をかむった山並が見える……」

「お山さんだつべ……」

「お山さんのことだつべ……」

話の途中で小さなつぶやきが教室のなかにおきていた。

お山さんは、石城町の西方に四つの頂を連ねる山で、ほとんど雪のふらないこの地方でも、お山さんの頂だけは、十月末から四月末まで白く雪をかむる。

小高い丘の上にある石城中学校の校庭に立つと、お山さんは、おどろくほどまぢかく、そのゆるやかな四つの曲線の全容を見せてくれる。いま、お山さんは、青みをおびた灰色でそびえているはずだった。

そんな生徒たちのようすにはおかまいなく、先生はしゃべりつづけていく。

「どんな山のなかの中学校だろうかと内心、気にしながらながめていたら、いきなり町並があらわれてバスが止まった。山は、同じ形のままで前方にある。なんだか狐につままれているような感じだったんだが、やっと、その理由がわかった。むかし、正確にいうと明治三十年二月二十五日だが、石城駅は、この町にできる計画だったけど、町の人の反対で町を迂回して、あんな海端にできたんだということを、ちょっと聞いたもんだから、みんなの中に、どうして町の人が反対したのか知っている人がいたら教えてもらいたいと思って、どうかね？ みんな……」

「先生！ おれ、知ってるよ！」

待ちかねたような大声をだしたのは、常夫だった。

成績は中ぐらいだが物知りの常夫には博士のあだ名がついている。

「さすが博士だな。ちょっと話してくれ。」

先生に指名された常夫は、得意気に立ちあがった。

「汽車が通るとよ、煙でみんな肺病になっちまうって、むしろ旗をおったてて測量もなんにもさせなかったんだと、そんなとき、先頭に立って騒いだのは……」

言葉をきった常夫は、視線を敏子の席のほうに移して意味あり気に笑った。

「それがよ。下の村と上の村の先祖様たちだったんだと、おかげで石城町は今でも損しててよ。ここに駅があれば、町だって、おれんとこの店だって、もっとはんじょうしてんのによ。せっか

くできるはずの駅を、わざわざ遠くへ追っばらっちまったなんて、恥ずかしくていえねえから、みんなほかからきた人には黙ってんのよ。」

いい終わった常夫は、ちらっと舌をだして腰をおろした。

「おしゃべり！」胸のなかで常夫に反発しながらも上の村生まれの敏子は、自分が責められているようで恥ずかしくて、また、ほてりだした両ほおに手をあててうつむいていた。

「おしゃべりめ！」

ななめ前の席で、同じ上の村生まれの光代が小声でいつている。

「お、おれ！」

うしろのほうで、椅子のガタンとたおれる音がして、どもりながら立ちあがった者がいる。良二だった。

クラス一大きな体格の良二がのっそりと立ちあがり目を白黒させて力んでいる。

「お、おれ！」

もう一度、良二はどもった。良二は、下の村の中農の息子だった。

「おれは、ちがうぞ！ 町に駅ができると、汽車は、下の村と上の村のたんぼの真ん中を通るんだ。そしたら、汽車の煙だのすすでまわりのたんぼの稲が枯れっちゃうべ。むかしの汽車は、石炭を焚いて走ってたんだ。んだから、みんな反対したんだ。百姓にとって稲は、生命の次に大事なんだぞ。下の村と上の村の百姓たちは真剣だったんだ。おれだって、そのころに生まれてれば、

まっ先に反対する。」

つかえつつかえ、しゃべる良二の言葉を敏子は、意外な思いで聞いていた。

良二の成績は、クラス中で、いや三年生全体のなかでも最低のはずだった。

良二は勉強にかんして、いっさい興味を示さない。宿題をしてきたことはないし、テストはいつでも白紙にちかい。

見かねた先生たちが無理に勉強をさせようとしても、

「百姓に学問はいらねえ、働けばいいんだよ。働けば！」

と、断固として拒絶する。小学校時代からの先生も、彼には、お手あげの状態だった。

その良二がしゃべったことに勢いをえたらしく、光代が立ちあがって常夫をにらみつけた。

「博士は、そんなことをいうけれど、下の村に工場ができたおかげで町に社宅が建って、博士さんとの店だってもうかってんだっぺ。欲っぱり！ それ以上もうけつことなかっぺ！」

口早にまくしたてた光代に、常夫は、まいった、まいった！ といったしぐさで、頭をかきき首をひっこめた。そのおどけたように教室じゅうが笑いだし、光代もつられてふきだしながら腰をおろした。

先生も笑いながら、

「わかった！ わかった！ 良二と光代のいいことは、よくわかった。とにかく、みんなの先祖は、そのときの自分たちの生活を守るために真剣に行動したということなんだ。その行動に

は敬意をはらうが、石城駅ができてから、まだ百年とたっていない。せめて、そのときに六十年、七十年先を見通すことができれば、今、こんな論争もおきなかったということだ。勉強というのは、知識をつめこむだけじゃないんだ。知識をもとにして何十年先をも知ることなんだ。」

先生の話は、いつのまにか勉強をしななければならないということに変わり、手は教科書を取りあげていた。

敏子は、あわてて教科書のページをめくった。良二は、もうふだんのもつさりした状態にもどり、ぼんやりと黒板をながめている。

五時間の終わりのチャイムは、駅の話で時間をとられたためか、いやに早く感じられた。

きょうは水曜日だから、授業はこれまでだった。ほっとした気分が教室じゅうに流れている。廊下まで出ていった先生が忘れものでもしたように、あわただしくもどって、

「掃除が終わったら、夏休みじゅうにやる高校進学のための課外指導の話があるから、課外希望者は、帰らないで残っているように、クラブ活動は、三年生にかぎり休み。」

と、大声でいって、眼鏡のつるの真ん中を人差し指でおしあげながら出ていった。

高校進学と聞いて、急に教室じゅうが騒がしくなった。男生徒のほうはさほどでもないが、女生徒のほうは、あっちこっちへと身体（からだ）のむきを変えて、べちゃくちやとしやべりだした。

敏子は、ぼんやりとすわりこんでいた。高校進学を意識した去年あたりから、今の自分の状態がわかっていたような気がする。

十日ほど前に進路指導についての用紙がわたされた。その夜、用紙を前に、進学、就職、家事手伝いのなかの進学コースへの○印をと望む敏子に、

「ばあちゃんに聞いてみな……」

と、そっけなかった母ちゃん。

「うん、そのうち、なんか商売して、ひともうけできればな。まあ、家事手伝いでいっかっぺ。」といった父ちゃん。

それでも、なんとか高校へ進学させてほしいと望む敏子の真剣な願いも、ばあちゃんの、「ほう、もうちっとの辛抱で給食費だのなんだのと金ばっかとする学校とも縁切りか、よかったな。」

との言葉で、水をさされてしまった。

「だって、みんなが行くんだから、高校さ行って、もっと勉強したいんだから……」

と、くいさがってみたが、

「ばあちゃんも年だで、そろそろ家んなかのことやんのもこわくてな。まあ、若いうちは、世間ものぞきたろうから、中学卒業して一、二年は、朝晩家んなかのこと手伝いながら工場さ勤めて金取ってくるのもいっかっぺが、それでも、二十歳ぐらいまでには縫物がひととおりでできるように習っとかねえではな。」

と、取りつくすきもなく、高校への進学はあきらめざるをえなかった。